第二次指導第一時

○　ノートに鉛筆をはさんで、本を出して、それ以外の消しゴムとかはしまいます。
○　それでは、ご挨拶をしましょう。おはようございます。
　　おはようございます。
○　昨日、一昨日と二時間かけてどういうお話かやってきました。今日は最後の方一時間やって終わります。

一　よむ

○　それでは、本を開いて読んでもらいます。今日読むところは、最後の6と7のところ、二人に読んでもらいます。
○　では、読む人は立って読んでください。後の人は本をしっかり持ってください。
　　（二人が順に読む）
○　さすが六年生だ。落ち着いた読みでした。

二　とく

○　昨日のおさらいをしましょう。
○　楊はお父さんの弟子になりましたね。（板書　弟子）
○　このお弟子さんが、苦労に苦労を重ねて一生懸命作って何といわれるようになった。（名人の声あり）
○　分かった人は手を挙げて。はい、あなた。
　　名人。
○　名人といわれました。（板書　名人　弟子から名人へ←）
○　年を聞くよ。名人といわれるようになった時に、楊は何才頃だったか。
　　六十過ぎ。
○　六十過ぎです。（板書　名人の上に　６０）
○　こっち（弟子を指し）は、わかるか。これ位じゃないかなと思ったところをいってください。
　　二十才。
○　若者といっているからね。二十前後でしょうね。
○　何年間修行しての。
　　四十年。
○　四十年だよ。若い時から毎日、練ったり、こねたり、形を作ったり、焼いたり、四十年間やった。すごいね。四十年やってとうとう名人といわれるようになったんだな。
○　それにしても、よく頑張ったもんだね。何か目標があったのです。頑張れる元は何だったか考えてください。
○　なぜ、こんなに頑張れたのか。誰か目標があったでしょ。
　　お父さん。
○　お父さんだよ。（板書　父）
○　目標、父よりどういうものを作ること。父より（板書　より）どういう物を作りたいという目標をもったのかな。
　　もっといい物を作ること。
○　父よりもいい物（板書　いい物）。これが目標だったんでしょ。
○　弟子になってからそう思ったのか。いつごろから思ったのか。
　　小さい時から。

○　小さい時からの目標。お父さんよりはいい物を作ってやろう。そして、弟子になって一生懸命作って作って四十年。それを目標にして。

○　そして、とうとう楊は名人だな。たいしたものだなと自分でもそう思ったんです。

○　思った次の日から、名人ということについてどう思ったかな。いつまでもずっと、父より勝れた名人だと思い続けましたか。

（　―　）

○　本当にそうだろうかという（板書　疑）ここまで書いたら…。

（疑問という声あり）

○　分かったら手を挙げて。はい、あなた。

疑問。

○　ああ疑問でいいな。長いから短く漢字一つでいいな。

（板書　疑に疑を書き加えて、その下に　い）

○　疑いをもったんです。そうではないんではないかな。みんなに父親よりもさすがに立派だといわれたが疑いをもったんです。名人（板書を指し）は正しかったの。正しくなかったの。

正しくなかった。

○　正しくなかったの。（板書　疑いの下に?を書きながら）クエッションをつけたが、やっぱり、父親よりよいということはなかったんです。残念ながらはっきり分かったの。

○　はっきり分かったのは、誰に会って、何を見た時に、バツ（板書　疑の横に　×）をつけたか。

貧しい農家の人に会って桃花片を見た時。

○　聞こえたか。貧しい農家の若者に会って、その話を聞いて、桃花片の何を見たの。

桃花片の水滴。

○　桃花片の水滴を見て、ああやっぱりバツだな。疑いどころではないんです。やっぱり楊より父親の方がすごかったと分かったんです。

○　今日、分かったところを勉強します。

〈手引き〉

○　ぼくとつな農家の若者が言ったところを書きます。指で押さえてください。（子ども達が指で押さえているのを確認してから）

○　全部書いたら長いので「わたしは、焼き物のことなど、さっぱり分かりませんが」の次から書いてください。

○　「これは、使っていて、水切りもよく」からずっと書いて「手もとにあるだけで、心持ちがなごんでまいります。」ここまで一つ書くんですよ。分かった。

はい。（全体の様子を見渡されて）

○　分かりましたか。（再度確認する）

はい。

○　そこを一つ。それからね。水滴を見て楊が考えたところがある。それを探してください。楊が思ったところです。（子ども達が指で押さえているのを確認して）はい、あなた読んでください。

この小さな一つの水滴にこめられた、陶工のいのちーたましいーに、はだでふれた思いであった。

○　書くところ、分かった人。分かったら手を挙げてください。

（全員が挙手するまで待って確認する）

○　では、ノートに書いてください。

三　よむ
四　かく　（板書）

「これは、使っていて、
水切りもよく、たいへん
使いやすいのです。
それに、このおだやかな
色といい、暖かな春の
感じといい、いつも手も
とにあるだけで、心持ち
がなごんでまいります。」

この小さな一つの水滴に
こめられた、陶工の
いのちーたましいーに、
はだでふれた思い
であった。

○　書いたところを見せてください。
（一人一人のノートを見て、小さな声でよしといったり
指導したりして、丁寧に見ていかれる）
○　全部閉じて、机の中に入れてください。
（子ども達全員が机の中に入れるのを確認する）
○　なぜしまわせたかというと、机の上に何もないと、先生が聞いたことに集中できるのです。

五　よむ
○　次に読む人はあなたですね。これ（板書を指し）はから読んでください。
（個読　一人）

六　とく
○　意味の分からない言葉がありますか。
（　―　）
○　みんな分かる。じゃ、聞いていきますよ。知らないのが一つもないようですから。
○　水切りも、よく分かりますか。どういうこと。
（　―　）
○　墨をするとき、水を入れるでしょ。水入れから。
水を入れた後もポタポタたれないですぐ。
○　水がポタポタたれない。斜めにして上げるとピタッと止まるのを水切りがいい。真っ直ぐしても端からポタポタ垂れる、これは水切りが悪い。よし、よく分かっている。
○　こっち（前の文）の方はいいかな。後ろの方にちっと難しいのがありそうだな。この辺に（後ろの文を指し）、「はだでふれた思い」というのがあるが、どういう思い。
感触。
○　ああ感触ね。肌で触って、ああ、こういう感じだな、という感じがはっきり分かったのを「はだでふれた思いであった」と。
○　肌で触れると暑いか寒いか分かるでしょう。手袋はめていてはだめでしょ。肌でなくてはだめ。

○　ここ（板書を指し）いのちーたましいーとかいてあるが、どういうことか分かるかな。
（　―　）
○　いのちーたましいー難しいね。いのちがあれば生きている。ないと死ぬ。そういうことだ。何をいっているんだろう。
○　焼き物を作った人のいのちとたましいだ。
いのちやたましいを込めて作る。
○　いのちやたましいを込めて作った。一生懸命作ろうという気持ちは、どこにあるの。
桃花片。
○　桃花片にもあります。
○　陶工のどこにあるか。作った人の……。
たましい。
○　たましい、どこにある。
○　みんなにも、たましいあるんだよ。
○　一番上のここ（頭を指し）みんなちゃんと持っているでしょ。頭にある考え、こういう考えで作っているよ。そういうことをいっているのではないか。
○　こういう気持ちで、気持ちといった方がいいかな。陶工の気持ちがよく分かったということ。
○　さあ、言葉の意味が分かったから、分けるんですよ。
○　今もすでに分けてあります。これは（前の文を指し）農家の若者が言った言葉。こっちは（後の文を指し）楊が思ったこと。
○　そこで、こっち（前の文を指し）農家の若者が言った言葉、二つのことを言っている。どこで分けたらいいか。
それに。
○　ここで分ければよい。
（板書　分ける括弧を二つ　赤チョーク）
○　さあ、前は、水滴の何を言っている。
水滴の良さ。
○　良さね。どういう良さが書いてあるか。
使い易さ。（板書　使いやすい　に傍線　赤チョーク）
○　そうそう。使ってみて、非常に具合がいいこと。それをいっている。
○　サァーとあげてパッとやっても、何か漏れないの。そういうふうに陶工が作ったのです。静かにやって、そっとやっても、勢いよくピュッと水を差して元へ戻せばパッと切れる（手で水を差して戻す動作）。とっても使い易い。簡単ではないんだよ。
○　こっち（後ろの方を指し）は、水滴の何のことを言っているの。
色のこと。（板書　色　に○　赤チョーク）
○　色のことを言っている。この色がまたたまらない。色がとってもよいということ。
○　どこがよいの。水滴の色のよいところを探してください。
おだやかな。（板書　おだやかな　に傍点　赤チョーク）
○　おだやかな色をしているところ。まだ、あるでしょ。
暖かな春の感じ。（板書　暖かな　感　に傍点　赤チョーク）
○　暖かな感じがする。どの人もそう思う。ああ暖かな感じだなあ。
○　もう一つ言ってごらん。
心持ちがなごむ。
（板書　心持ちがなごんで　に傍線　赤チョーク）

○　これはすごいね。気持ちまで変わるように作ったと言います。見た人の気持ちが、変わってくる、とってもすばらしい。
○　さあ、これ聞いていてね。楊は、これはお父さんにかなわないなあ。こう思った。
○　私は、使い易いところまでは作るかもしれないが、心持ちがなごむところまでの物は、どうも作れそうもないなあ。
○　疑問でなくて、バツ（板書の×を指しながら）だなあ。そう思ったんです、聞いただけで。
○　さあ、お父さんの作った水滴を見ましたよ。これ見てね、分かりました。はだでふれた思い。（板書　思　に○　赤チョーク）何がわかったの。
　　陶工のいのちーたましいー。
　　（板書　陶工の　たましい　に傍線　赤チョーク）
○　陶工、こういう気持ちで作った。
○　陶工、誰のこと。
　　父親。
○　父親のことだったんです。
○　あとで見たら、爪でちゃんと刻印が押してあった。ああ、父親の考えが、今、分かった。
○　父親の考えを、前に聞いたことあったのか、なかったのか。
　　あった。
○　あったんです。肌で感じておったよ。前も同じこと聞いているよ。全くそうだ、と心の底から思って……。はい、あなた。
　　いなかった。
○　いなかったんです。それが、分かった。
○　若いときは、いつも、聞いているんだが、耳に入らない。水滴を見せられて、うん、分かった。お父さん、脱帽いたします。脱帽は、帽子を脱ぐことだよ。
○　気がついて、これから楊は、お父さんにはかなわないんだが、この仕事を続けるだろうか。やめてしまうだろうか。どっちだと思う。
　　続けると思う。
○　多分ね。年取って、体が思う通りにいかないが、よし、父親のあるところまでいってみよう。これは（板書　父よりいい物を指して）まだ変わらないのではないの。父よりいい物に近づこうと。

七　よむ

○　「これは」から、一緒に声を出して読んでください。大きな声出せるか。
　　はい。
　　（指音読　一回　理解と自信がこもった声）
○　よかったね。
○　では、これで三日間のお勉強を終わりましょう。
　　（礼）